

## 国際バカロレア IB-PYP を導入した初等英語教育

～認可幼稚園初の PYP 校が小学部を設置、バイリンガル一貫校へ～

## International Baccalaureate for Early Childhood & Primary Education

— First IB-PYP Kindergarten in Gifu Starts an Elementary School —

鈴木 克 義

SUZUKI Katsuyoshi

キーワード：国際バカロレア、IB-PYP、小学部、バイリンガル、初等英語教育  
Keywords: IB-PYP, Junior School, Bilingual, Primary English Education

2020 年度に導入される新学習指導要領で、公立小学校の英語が 3 年生からと低年齢化し、小 5・小 6 の英語は正式な教科となる。文科省はこれに伴い、これまでの担任が中心の英語指導を転換し、2018 年度の予算で英語専科教員を配置する予算を初めて要求し、これまでの音声中心から、文字や文法も導入した検定教科書のパイロット版をウェブ公開した。

こうした動きを受けて私立中学校の入試では、英語を選択科目に導入する学校も増えているが、初等英語の低年齢化に伴い、東海地区の幼稚園では国際バカロレア IB-PYP をカリキュラムに導入して、英語バイリンガル保育を始めた園があり、静岡県内にも姉妹園ができた。

IB-PYP は 3 歳から 12 歳までが対象のカリキュラムなので、一条校として初めて PYP を導入した岐阜の幼稚園では「小学部」を設置し、卒園児を中心に近隣の公立小学校に籍を置く児童を集めて、幼稚園から初等まで一貫した英語バイリンガル教育を行っている。

文部科学省も「2020 年度までに国際バカロレア導入校を 200 校に」という目標を掲げ、中学・高校を中心にグローバル教育、探究学習、インクルーシブ教育などの特長を持つ IB-DP のカリキュラム導入を支援してきたが、IB 導入では先進的なオーストラリアでは PYP を新たに導入し、IB-DP はむしろ取りやめる動きも出てきているので、今後養成校では、幼児期から初等までの一貫した英語バイリンガル教育を担える教員養成を、早急に始める必要があるだろう。

はじめに：文科省が初等英語の方針を転換、専科教員と文字を導入へ

2020 年度開始の新学習指導要領で、初等英語の導入が 3 年生に早まり、5 年生からは正式な教科となって週 2 コマに増加、評価も行われる。

これに伴って今まで、担任が主になり、総合的学習の時間などを利用して行ってきた英語活動が、教科となって検定教科書も作成されるため、様々な変化が起きている。

まずは 2018 年度の予算要求で、文部科学省が初めて初等英語の専科教員を配置する予算

を盛り込んだ。まだ英語と体育を合わせて 2,200 人分とのことなので、全国に 2 万校以上ある小学校には到底行き渡らないが、地域の拠点校に 1 人ずつ英語の専科教員と ALT を配置して、教科になる 5・6 年生を中心に回るようにすれば、これを機に早期退職しようと考えていた、ベテラン小学校教員の多くを救うことになるはずだ。

文科省はまた、正式な教科になる前の移行期間に小 5、6 年生が使える英語教材をウェブ上で公表した。これは従来「英語ノート」で重視していた「話す・聞く」力に加え、「読む・書く」力も育てるもので、初めて文字や、過去形などの簡単な文法も導入した。

従来の英語ノートでは、20 年前に小学校英語を必修化した韓国に倣い、音声中心で文字を導入しないテキストとしていたが、本家の韓国がとくに文字を導入し、担任による英語指導もあきらめて専科教員を導入しているのを、ようやく 20 年遅れで追随しようとしている。

文法にしても、英語の環境で生まれ育つわけではない日本の子どもに、外国語として英語を教えるなら、会話でよく用いられるが日本語ではあまり意識しない、完了形や仮定法などは教えておいたほうが良い。仮定法は今のところ高校まで教えないので、中高英語カリキュラムの大幅な見直しが必要である。

もちろん大学の教育学部では、新たに英語専修の初等学校教員を養成しなければいけないし、中高の英語教員を養成している教職課程の見直しも行わなければいけない。それらが無事に立ち上がって卒業生を出すまでには少なくとも数年はかかるから、それまでの間、韓国では外国人教員に頼ったが、優秀な外国人を雇うのも難しいので、当面は日本人で J-SHINE（小学校英語指導者）の資格を取得した人や、2018 年度から保育英語検定協会が始める「教職英語検定」の資格取得者に頼ることになりそうだ。

#### 静岡にも現れた国際バカロレア対応のバイリンガル幼稚園

小学校での英語教科化を受け、首都圏ではすでに 95 校の私立・国立中学が入試に英語を導入し、幼少期からの英語熱が高まっているが、東部の加藤学園が 1990 年代前半に英語イマージョン教育を導入して以来、目立った動きがなかった静岡県内でも、100% 英語で保育を行う MEK イングリッシュプリスクールが 2004 年に静岡市内に誕生した。

その後 MEK の経験者が 1 歳からの英語プリスクール、ベイビーバッチを立ち上げ、2014 年には同じ静岡市駿河区に 2 歳からのプリスクールと小学生向けアフタースクールを展開する、NB インターナショナルキンダーガーデンが誕生した。

ここのホームページには教育方針として「国際バカロレア認定校を目指し、立候補いたします」と書かれており、志の高さを感じさせる。偶然、かつての本学英語英文科子ども英語コースの卒業生がここで働いていることが判明し、代表の田形氏とお会いして見学をすることができた。

幼少期の国際バカロレア、IB-PYP を導入する意義については昨年の紀要でも述べたとおり、世界各地を渡り歩くグローバル企業人の子弟にとっては、共通のカリキュラムに基づき英語で教育を受けられることが何よりも重要である。それは本学付属の幼稚園・小学校はもとより、英語イマージョン教育を行っている加藤学園の幼稚園、初等学校でも IB-PYP なしでは力不足だったのである。（鈴木 2016）

そこに登場したのが認可幼稚園として初めて、国際バカロレア PYP 認証を取得した岐阜

のサニーサイドインターナショナルスクールで、その経緯は昨年の紀要でも詳しく述べたが、その後浜松で英語バイリンガル小学校を立ち上げる学校法人や横浜の英語幼稚園、静岡市内で英語保育を始める認定こども園などを伴って計4回、岐阜市の郊外へ見学に訪れるうちに、この IB-PYP 幼稚園の壮大な野望が見えてきた。それは PYP を導入した英語バイリンガル教育の認可小学校を、「なし崩し的に」作り上げることだったのである。それは小学部という名称で、すでに始まっていた。

### 小学部を設置して IB の幼小連携教育を実現

IB-PYP は3歳から12歳までを対象としたカリキュラムなので、幼稚園やこども園で導入したとしても小学校への連続性が保ちにくい。そのため、導入を躊躇している園もあるようだが、サニーサイドスクールはこの点を2016年度からの「小学部設置」という、画期的なアイデアで解決してしまったのだ。

サニーサイドの渡辺校長は1年半前に話を伺ったときから、小学校まで開設したいという希望を持っていたが、サニーサイドスクールのウェブサイトを見ると、いつしか「小学部」という名称が登場するようになっていた。疑問に思っていたが、実際に現地を見学して納得した。1年生から5年生まで、十数名の子どもたちが同じ部屋で学習していて、子どもたちはそれぞれ自分の地元の公立小学校に在籍したまま、ここに通ってきている。いわば IB 版のフリースクールや山村留学といえようか。

新たに小学校を設立するとなると、大変な手間と時間が必要になるが、ここでは幼稚園で PYP を体験した親が引き続き、IB の教育を受けさせたいと言って子どもたちをサニーサイドスクールに通わせており、在籍する公立小学校では不登校の扱いになるが、出席状況を定期的に知らせているため、小学校の卒業証書はもらえるそうだ。

2017年度からは新たに十数名の1年生が入ってきて部屋を分け、小学部専用の校舎も建築中である。渡辺校長によると、「こちらに来たいと言っている子どもを受け入れない訳にはいかない」と言うが、いずれ人数が50名程度に増え、親のほうから正式な小学校にしてほしいという要望があれば、岐阜市中心部の廃校になった小学校校舎を借り、「なし崩し的に」認可小学校を立ち上げるつもりだそうだ。



子どもたちは IBらしく、めいめいの課題やグループプロジェクトに取り組ん

でいて、工作をする男子や iPad で読書や調べ物をする女兒もおり、それを外国人と日本人の教員が見守っている。一斉授業が中心の日本の小学校とは異なる風景が見られる。

現在、2年生から6年生までは異学年が同じ教室で学んでいるため、子ども同士で教え合う探究型の協同学習を行うという、IB はもちろん文科省が目指す方向にも合致した教育が、バイリンガル環境で行われているのである。

子どもの英語力に関しては、渡辺校長によると「小学校卒業までに喋れればいい」そうで、保護者からは IB 導入前よりも英語の割合が減ったという苦情もあったそうだが、外国人教

員が英語で子どもに話しかけ、日本人は日本語で話すことによって、子どもたちは英語と日本語を相手によって使い分けるバイリンガルに育っている。

以前からいた日本人教員も、英語を話さなければいけないというストレスもなく、英語導入のしかたとしては上手いやり方だろう。これは現地語を重視する国際バカロレアの理念による部分も大きいと思われる。英語 100% で日本語禁止！などとやっているプリスクールでは、子どもも職員も目が笑っていないような、張り詰めた雰囲気も見られるが、サニーサイドではそんなことはなく、「楽しいか？」と校長が尋ねた子どもが大きく頷いていたのが印象的だった。

気になる授業料だが、サニーサイドスクールのウェブサイトによると月額 5 万円（給食費込み）で、無料の公立小学校と比べれば高額だが、既存のインターナショナルスクールで IB 教育を受ければ十数万円かかるので、むしろ妥当という考え方もできるだろう。

なお、サニーサイドインターナショナルスクールの幼稚園は、給食費や送迎バス利用料も含め月 4 万 6 千円で IB 教育を行っており、私立幼稚園児に国から交付される就園奨励費も考慮すると、格安で IB-PYP 教育を受けられる幼小連携の教育機関ということになる。

参考までに、静岡で 1990 年代から英語イマージョン（50% 英語のパーシャルイマージョン）教育を行っている加藤学園幼稚園の保育料は、送迎バス代別で 6 万円、初等学校へ進むと 7 万 5 千円程度である。それでも認可外のインターナショナルスクールよりは安い。

他に国内の認可幼稚園では、加藤学園にも近い長泉町のエンゼル幼稚園が PYP の候補校になり、2017 年 6 月より IB 教育を行っている。ここは複数の外国人スタッフに加え、日本人の IB コーディネーターが中心になって、英語バイリンガルで保育を行っている。

ここがサニーサイドに続き、英語で IB-PYP 教育を行う認可幼稚園第 2 号ということになるはずだが、もう 1 園、町田こぼと幼稚園が 2017 年 3 月から日本語 IB-PYP の候補校になっており、ここが IB-PYP の認可幼稚園では 3 園目、日本語 PYP では初めてということになりそうだ。

サニーサイドスクールの小学部方式を使えば、時間と費用がかかる小学校を正式に立ち上げなくても、3 歳から 12 歳までの IB-PYP 教育ができることになり、少子化時代に生き残りを図る、全国の英語幼稚園には朗報となるだろう。

## オーストラリアの IB-PYP 導入スクール

日本ではまだ始まったばかりの IB-PYP だが、世界的には DP や MYP よりも伸び率が高く（福田 2014）、今後日本の英語教育の低年齢化にも伴い、もっとも需要が高まる IB は PYP と思われるので、筆者は実際にオーストラリアの IB 導入園と小学校の様子を視察してきた。オーストラリアは PYP 導入園が人口比で多く、幼小連携で PYP のみを導入している学校も見られるためである。

オーストラリアの IB 導入スクールは基本的に私立で、幼小から中高まで一貫して IB 教育を行うカレッジと称する学校が多い。十年ほど前にも一度、シドニー郊外の私立 IB カレッジを訪ね、高校留学の日本人が数名、自分専用の MacBook を Wi-Fi でウェブにつないで、リサーチをしている姿が見られたが、今回の訪問では幼小を中心に見たため、iPad などタブレットの活用が目立った。

シドニーから電車で 30 分ほど乗った Strathfield という町にあるトリニティ・グラマー

スクールは、Preparatory School と称する幼稚部から男子のみのミッション系名門進学校で、幼児もネクタイをきちっと結び、中国人の教員が中国語を教えていた。おそらくアジアからの移民が多いオーストラリアという土地柄か、中国語のニーズが高いのだろう。



Junior School と呼ぶ小学部では、子どもたちがグループで研究をしていて、その成果をプレゼンして見せてくれた。

非常に礼儀正しくきちんとしており、校内のあちこちで、子どもたちが直立不動で先生の話を聞いている姿も見られ、しつけがしっかりできている様子だった。

高等部の Senior School ではもちろん、IB-DP が導入されているのだが、IB-PYP コーディネーターの Ms. Marilyn Ormes 先生によると、DP のフルスコア（45 点）を取った生徒が前年度は 5 人出たそうで、これは DP だけでなく PYP から IB を導入している成果だと、自慢げに話していた。

実際、DP フルスコアを複数の生徒が取ったなんていう話は他の学校ではあまり聞いたことがなく、欧米の名門大学でも入学の基準スコアは 36 点あたりなので、英語 DP でフルスコアを取っていればオーストラリア国内はもちろん、世界のトップランキングに入るような大学でも簡単にに入れてしまうことだろう。



もう一つ、シドニーの中心部からほど近いクランブルック・スクールに付属する、セントマイケルズ・プリスクールを見せてもらうことができた。

ここは典型的なアングリカン（英国国教会）付属の幼稚園といった感じで、トリニティほどの厳しさはなく、IB についてもそう言われなければ気づかないぐらい、他の IB 幼

稚園と比べると自由に導入しているようだった。

外国語に関してはフランス語を教えているようで、母国語を重視すると同時に世界へ目を向ける、多言語主義の IB 校らしさが見られた。

いずれの IB スクールでも特徴的だったのは、就学前の IB-PYP から始めて小学校、中高の IB へと繋げていく姿勢で、日本ではまだ DP のみか MYP までの導入が多いが、オーストラリアではむしろ DP を取りやめて PYP を導入する事例もあり、近い将来日本でも、とくに公立小学校の英語教科化に対抗するためにも、私立の幼稚園・小学校では英語による IB-PYP の導入が進んでいくと思う。

## 英語 IB か日本語 IB か

文部科学省は 2013 年 6 月に「日本再興戦略 -JAPAN is BACK-」を閣議決定し、「一部日本語による国際バカロレアの教育プログラムの開発・導入等を通じ、国際バカロレア認定校等の大幅な増加を目指す（2018 年までに 200 校）」と提言した。

これを受けて、それまで英語・フランス語・スペイン語の 3 カ国語に限られていた IB-DP の日本語版開発が進められたが、2018 年までに 200 校という目標の達成は不可能であることが分かり、2016 年 12 月に閣議決定された「まち・ひと・しごと創成総合戦略（2016 改訂版）」では、「国際的に通用する大学入学資格が取得可能な教育プログラム（国際バカロレア）の普及拡大を図り、2020 年までに国際バカロレア認定校等を 200 校以上に増やす（2014 年の 74 校から 2016 年 10 月現在で 101 校に増加）」と改められた。

この数字を文部科学省の国際バカロレアウェブサイトを検証してみると、2017 年 6 月 1 日現在で PYP 実施校が 22 校、MYP 実施校が 14 校、DP 実施校が 33 校で合計 69 校にしかない。

さらに学校教育法第 1 条校だけに限ってみると、PYP はサニーサイドスクールだけの 1 校、MYP は加藤学園暁秀中等学校・高等学校と玉川学園中等部・高等部、東京学芸大学附属国際中等教育学校の 3 校に 2017 年度から市立札幌開成中等教育学校と埼玉県の昌平中学校が加わって 5 校、DP はぐんま国際アカデミーや福岡のリンデンホールスクールなど 17 校である。合計 23 校だが、1 校で MYP と DP 両方の認定を受けている学校もあるので、学校数だけでは 20 校となる。

この現状では 101 校にはならないが、2013 年度以降は認定前の候補校の数も含めることになったようだ。候補校も含め掲載しているサイトによると（NAVER まとめ 2016-12）、候補校または導入検討中の学校が 28 校ある（2017 年度認定校を除く）。これで合計 97 校。その後候補校が増えたのかもしれないが、それでも目標の 2020 年度までに 200 校達成は難しそうだ。

そこで文部科学省としては、日本語による IB-DP の普及を図り、2017 年 6 月 1 日現在、同省ウェブサイトによると一条校で 8 校、それ以外で 1 校が日本語 DP を導入している。

IB 教員の養成も日本語を主にして進めるつもりかもしれないが、たとえば日本語 DP のスコアは、大学入学の資格として国際的に認められるだろうか。

2014 年 3 月に文部科学省と国際バカロレア機構が開いた「国際バカロレア・大学入試活用セミナー」では、英米加豪の有力大学関係者が登壇し、IB-DP のスコアが優秀だった学生は、入学後の大学での成績も優秀だったという追跡調査などが発表された。

その場で、日本語 DP のスコアも入試で英語 DP と同等に扱われるのかという質問が出て、それまでフランス語とスペイン語の DP も同等に扱われて来たので、日本語 DP も同様に扱われるはずとの答えだった。

しかしながら日本の大学はともかく、英語圏の大学に進学する場合は当然、教育も英語で行われる訳で、筆者の経験では相当な英語力がないと優秀な成績を取って卒業するのは難しいと思われる。いずれ、日本語 DP による受験者には TOEFL や IELTS などのスコアを要求する大学が出てくる可能性もある。

それならば最初から、英語で IB を導入しておいたほうがアドバンテージになる訳で、英語は子どもの脳神経細胞が減少し始める 5 歳ぐらいまでに始めたほうが身に付きやすいため

(鈴木 2010、2011) 幼少時からの IB によるバイリンガル教育を行う幼稚園・小学校に人気が集まるに違いない。

今後は、公立学校では日本語による IB 導入、私立では英語による IB バイリンガル教育と、二極化が進むと思われる。

ただ英語で IB 教育を行える人材を探すのは至難の技で、優秀なネイティブ教員を採用するのは非常に難しいため、PYP のレベルではとくに、日本人教員で英語 IB をやって行こうという流れになるはずである。

鶴川女子短期大学では 2017 年度から、専攻科に一年制の「国際こども教育専攻」を設け、英語で保育ができる人材の養成に乗り出している。

保育系の学生はこれまで、英語はあまり得意でなくても就職はほぼできるため、敢えて英語を身につけようという動機に乏しかったが、鶴川女子短大の専攻科では英検や保育英検の取得級に応じて授業料の減免というインセンティブを設け、英語ができる学生を集めようとしている。たとえば 2 級の取得者には 10 万円を減免、準 1 級なら 25 万円減免となり、これはちょうど半期分の授業料と同額である。

保育系や初等教育系の学部・学科を持っている養成校では今後、英語による IB-PYP 教員の育成に取り組む必要がある。

#### おわりに：幼少期から自分で学ぶ子どもを育てる PYP

「ゆとり世代」が、とかく学力不足だとかストレスに弱いなどと揶揄されるが、本当にそうだろうか。むしろ知識詰め込み教育から脱して、生きる力や考える力を重視した教育は、物怖じせずグローバルに活躍するスポーツ選手などを生み出しているようだ。

富士河口湖町にあるマリア国際幼稚園では、20 年以上前から日本人教諭による英語保育を行ってきたが、10 年ほど前から「学力世界一」のフィンランド教育を取り入れ、2013 年には子どもが自分で課題を見つけて探究学習を行う、スオミ小学校を開校した。

その後の子どもたちの成長は目覚ましく、環境問題から食物連鎖、LED や素粒子まで興味の対象は広がり、必要なら MacBook や iPad で英語の文献も検索して、毎学期末のプレゼンテーションで成果を発表する。

この学校は IB を採り入れている訳ではないが、フィンランドがカリキュラムを ICT 利用の課題探究型に大きく切り替えた時期と、IB-PYP が誕生したのはほぼ同じ西暦 2000 年代の直前で、両者には共通点が多い。

子どもたちは自分が関心を持った問題なら喜んで何時間でも探究するし、その過程で英語や数学が必要だと思ったら自分から学ぶ。その反面、暗記を強制された知識は、必要がなくなればすぐに忘れるのである。

ここ数年、国内外の IB 教育の現場を数多く訪れたが、どこでも子どもたちが目を輝かせ、和気あいあいと議論し、協同してプロジェクトに取り組み、バンドを組んで歌で成果を発表し…といった科目横断型の課題探究学習に取り組んでいた。整然と机に向かって教師の話を聞くだけという教室は、1 つもなかった。

あくまでも子どもたちが主役で、教師はサポート役に徹していた。そうすれば子どもは自ら学ぶのである。教師が教えてしまったら、子どもは学ばない。

2016 年 11 月に行われた日本国際バカロレア教育学会の大会では、「インクルーシブ」をキー

ワードとした研究発表が多く見られた。日本では通常、インクルーシブ教育というと障害児も包括した教育を意味するが、オーストラリアではあらゆる人種、国籍、母語を持つ、むしろ Gifted と呼ばれるような優秀な子どもたちが、IB スクールで学んでいる姿が見られた。クリティカル・シンキングや探究を基軸とした IB の学習スタイルは、今までの日本の教育で落ちこぼれたり、逆に才能を発揮しきれなかった子どもたちに活躍の場を与え、日本と世界にイノベーションをもたらすグローバル人材を育てるに違いない。

サニーサイドスクールの渡辺校長も、加藤学園から転出してぐんま国際アカデミー小学校の副校長を長年務めた井上春樹氏も、揃って幼児期からの PYP 導入の必要性を口にする。オーストラリアの IB コーディネーターも、PYP から導入しているから DP のフルスコアが取れると言っていた。

ただ、欧米と比べて日本で IB-PYP がなかなか普及しない要因は、幼稚園と小学校が接続した、グラマースクールと呼ばれるような学校が少なく、小規模な幼稚園では IB 導入に伴う約 300 万円の初期費用や、年間 100 万円ほどの運営費が負担になるからだろう。サニーサイドスクールでは、岐阜から首都圏で行われるワークショップに職員を派遣する費用や新幹線代などの負担も大きかったという。

今後、IB 導入を推進する文部科学省では、DP のワークショップだけでなく PYP ワークショップの無料開催、初期費用や運営費用の補助、IB 教員の紹介や人事交流など、PYP 導入のハードルを下げる支援が望まれる。

また、自分が教えられたようにしか教えられない日本人の教員には、意識改革のための研修、そして IB 教員を育てる国際教育学部の設置も必要だろう。

すでに筑波大学や玉川大学の大学院では IB 教員養成のコースが設けられているが、おもに日本語 DP が対象なので、都留文科大学のように英語で IB が教えられる教員養成を、PYP のレベルでも実施すべきである。

日本人だけでは人材が不足するなら、IB 教育を経験した留学生を招いて日本語教育を行い、英日バイリンガルで IB を教えられる教員を養成すればよい。

#### 参考文献、ウェブサイト

- ・朝日新聞デジタル (2017-8-29) 「教員支援に 3600 人 小中で多忙緩和策 文科省」  
<http://digital.asahi.com/articles/DA3S13105867.html>
- ・日本経済新聞電子版 (2017-9-21) 「小 5、小 6 向け英語教材 移行期間用に文科省が公表」  
[https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG21H7A\\_R20C17A9CR8000/](https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG21H7A_R20C17A9CR8000/)
- ・受験情報ブログ (2017-1-5) 「2017 年入試では 95 校が「英語（選択）入試」を実施！」  
<https://www.syutoken-mosi.co.jp/blog/entry/entry000417.php>
- ・鈴木克義 (2016) 「幼児教育における国際バカロレアへの対応」常葉大学短期大学部紀要
- ・鈴木克義 (2015) 「急速なグローバル化と国際保育者養成のニーズ」常葉大学短期大学部紀要
- ・鈴木克義 (2014) 「国際バカロレア導入と IB 教員養成のニーズ」常葉大学短期大学部紀要
- ・文部科学省 (2016-8) 「国際バカロレアについて 4. 国際バカロレアの認定校」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/1307999.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307999.htm)



- サニーサイドインターナショナルスクール ウェブサイト  
<http://www.sunnyside-international.jp/>
- 福田誠治 (2014) 「国際バカロレアの歴史」 学力問題 PT 報告書 国際的な教育プログラム「国際バカロレア (IB)」と日本における学びのあり方、国民教育文化総合研究所
- トリニティ・グラマースクール ウェブサイト  
<https://www.trinity.nsw.edu.au/>
- クランブルック・スクール ウェブサイト  
<http://www.cranbrook.nsw.edu.au/>
- 文部科学省 「6. 国際バカロレアの推進に関する提言等」 ウェブサイト  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/1352964.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1352964.htm)
- 鈴木克義 (2010) 「英語は小学校からでは遅すぎます！」 幼年教育出版
- 鈴木克義 (2011) 「英語幼稚園・英語託児の必要性和将来性」 常葉学園短期大学紀要

